

| Column |

ART &  
CULTURE  
around 芸劇



## 次代を照らす表現を、 「東京演劇道場」から発信

「若い人とある程度まとまった時間を、長期的に取ってやっていく方法がないかなと思っています。まだなんと呼べばいいのかわからないのですが……その形をこれから探り始めようと思っています」

東京芸術劇場の芸術監督を務める野田秀樹がそのように語ったのは、2018年6月の「野田秀樹を囲む記者懇談会」の場だった。その後、2019年1月の記者懇談会で、野田は“次世代の役者・芝居人のための修行の場”に向けてオーディションによりメンバーを選出したこと、「東京演劇道場」をスタートさせることを発表した。道場に集ったメンバーたちは、国内外のアーティストにより行われる多様なワークショップに参加し、さまざまな経験を積んだ。そして2020年に第一回公演として「赤鬼」（作・演出：野田秀樹）に挑戦、2021年末のオーディションにより新たなメンバーが加わり、2023年1月に第二回公演「わが町」を柴幸男の演出で上演した。

取材の場では、いつも歯切れ良く記者の質問に答える野田だが、道場について語る時は少し様子が違う。当初は道場に対するイメージを固定させないようにしているのかと思ったが、もしかしたら野田は、道場をインキュベーターと考えていて、道場メンバーがいつどんな形で<sup>ひか</sup>孵化してもいいように刺激は与えつつ、道場という場の核や未来については、そのままそっくり、“卵”である道場メンバーに委ねるつもりなのではないか……始動から数年経った今、そう感じるようになった。

というのも、道場は何かしらの強固なカリキュラムに則って展開されているわけではなく、ワークショップを通じて「舞台における正解とは何か」が示されるわけでもない。また参加する道場メンバーらの出自はさまざま、例えば身体のワークショッ



東京演劇道場 第一回公演「赤鬼」

撮影：篠山紀信



東京演劇道場 第二回公演「わが町」

撮影：引地信彦

プで生き生きとする人と、エチュード稽古で力を発揮する人では顔ぶれが異なる。つまり道場メンバーらが体感できるのはおそらく、舞台表現の多彩さと無限のアプローチ方法、さらに自分の“未知なる可能性”で、“公演”はそれらを自他共により強く感じられる絶好の場なのではないだろうか。

立ち上げから4年。コロナ禍を経験し、既存の舞台表現に変化が求められる今、「東京演劇道場」はまた新たなフェーズを迎えた。今秋には、道場メンバーの有志がそれぞれ企画を立案し、ワーク・イン・プログレス公演を行う予定だ。道場で受けた刺激を、彼らはどのように自分の表現に変えていくのか。次なる一歩に大きな注目が集まる。

文：凜（演劇ライター）

東京演劇道場 ワーク・イン・プログレス/Dojo WIP(仮) 11月22日～26日 シアターイースト 詳細はP10へ

### INFORMATION

●東京芸術劇場へご来館される皆さまは、当劇場WEBサイトの「新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけ変更に伴う来館者及び公演等の主催者の皆さまへのお願い」や、館内掲示されている注意事項などをご確認ください。  
[http://www.geigeki.jp/info/covid19\\_notice/](http://www.geigeki.jp/info/covid19_notice/)

●東京芸術劇場 一時休館のお知らせ  
東京芸術劇場は設備更新工事を行うため、以下の期間、休館いたします。  
休館期間：2024年9月30日～2025年7月中（予定）  
<http://www.geigeki.jp/info/20230403/>



#### 〈鑑賞サポート〉について

東京芸術劇場では、一部の事業で、視覚・聴覚障害者のための舞台鑑賞サポートやヒアリンググループ、各種割引、託児サービスなどの〈鑑賞サポート〉を行っております。ぜひご利用ください。

詳細 ▶ 劇場HP内「鑑賞のサポート」ページ  
[www.geigeki.jp/access/support.html](http://www.geigeki.jp/access/support.html)

掲載情報に変更がでる場合がございます。最新情報は、劇場や各主催者のHPなどをご確認ください。

次号の発行は2024年1月1日を予定しています。

東京  
芸術  
劇場

Tokyo  
Metropolitan  
Theatre